陸連時報

2015 平成27年 1 月号

題字は平沼亮三（初代陸連会長）の書

目　　次

仁川アジア競技大会を終えて（専務理事　尾縣貢）…… 166

強化関連情報（強化委員会）…… 167

　強化新体制について（理事・強化委員長　原田康弘）

　「青木半治杯 2014国際千葉駅伝」を終えて（強化委員会幹事　吉川三男）

　第１回アジアユース陸上競技選手権大会（2015 ／ドーハ）日本代表選手選考要項

　第９回世界ユース陸上競技選手権大会（2015 ／カリ）日本代表選手選考要項

功労章・秩父宮章・高校優秀指導者章・中学優秀指導者章・勲功章…… 173

第10回全国小学生陸上競技交流大会優秀選手「研修会」報告（普及育成委員会　井筒紫乃）…… 176

大会観戦ガイド…… 178

陸協NEWS…… 180

事務局からのお知らせ…… 182

公告

「陸連時報」は公益財団法人日本陸上競技連盟定款第４条第６号の「機関誌」の性格を有するものでありますが、毎月「陸上競技マガジン」と一体として発行しています。陸上競技に関する啓発記事のほか、必要に応じて、評議員会、理事会の決定事項、各専門委員会、事務局からの報告、通達も掲載いたします。本時報に掲載した通達は、公式に通達したものと取扱わさせていただきますので、登録競技者は本時報の掲載内容にご注意下さい。また、陸上競技指導者の方は、所属競技者にお知らせ下さるようお願い致します。

公益財団法人日本陸上競技連盟

仁川アジア競技大会を終えて

専務理事　尾縣　貢

アジアが急激に進化していることを痛切に感じた大会となった。「アジアは世界への架け橋」と考え、本大会をオリンピックや世界選手権大会に向けての試金石として位置づけていたが、アジアの競技力は想定を超える水準に達しており壁にはねのけられた感があった。

日本チームのパフォーマンス自体は決して低くはなかったが、獲得した金メダル３個は、目標の10個に遠く及ばないものであった。競技種目数は男女合計で47、そのうち中国が15種目、バーレーンとカタールの２国が15種目で優勝を果たした。したがって３国で約2/3の金メダルを獲得したことになる。多くの種目で圧倒的な強さを見せつけられ、2020年東京オリンピックへの道程が極めて厳しいものであることを感じた。2016年そして2020年に向けて立ち止まらず歩を進めるために、今回の日本チームの競技結果を分析し、そこから得られたことを今後の本連盟の活動に活かしていきたい。

中国の復活

中国は、自国で開催された2008年の北京オリンピックで銅メダル２個（男子０、女子２）という惨敗に終わった。そして、オリンピックの７年後の2015年に再び北京で世界陸上競技選手権大会を開催する。国の威信をかけて取り組んだ北京オリンピックでの予期せぬ敗北の後、同じ轍を踏まないように競技者の強化に取り組んだ成果が本大会での躍進であると考える。

中国チームの勝利の中でも圧巻であったのが、日本の金メダルが有望と言われていた男子４×100mリレーと男子やり投の２種目であった。両種目ともアジア記録での優勝であり、特にやり投の89m15は今年度の世界ランキング２位である。また、４×100mリレーの37秒99も同４位であり、ロンドンオリンピック３位の記録を上回る。また、今季に男子走幅跳で８m47（世界ランキング３位）をマークした李金哲、男子棒高跳で５m80（同４位）をマークした薛長鋭は、危なげなく金メダルを獲得した。また男子三段跳では、曹碩が17m30の本年度世界ランキング７位の記録で優勝を決めた。

北京オリンピックで低迷を極めた中国男子の躍進の原因を分析することは、わが国の強化のヒントを見つけることにつながると考える。先ほど挙げた中国男子選手は、現在23～29歳。北京オリンピックに影響を受けた世代であり、オリンピックを目指した中国の強化育成の効果が遅れて表れたと考えることもできる。全員、オリンピックには出場していないが、オリンピック開催がプラスに働いたのであろう。2020年に向けての本連盟の強化育成プランは、オリンピック本番での活躍に照準を合わせているが、オリンピック後に活躍するアスリートを育成することも考慮に入れなくてはならない。

そして、中国躍進の直接的な要因としては、北京オリンピック後の強化策の成功をあげることができよう。中国の強化担当副会長の馮樹勇氏の話では、「有望種目では優秀な外国人コーチを招聘したり、海外に拠点を構えて外国人からコーチングを受けている」ということである。これが契機となって、一気に記録を伸ばしたものと考えることができる。中国が採用した強化策をそのまま日本に持ち込めるわけではないが、海外を拠点に活動するアスリートを積極的に支援していく体制を整えていきたい。

西アジアの台頭

バーレーン９個、カタール６個の金メダルのうち13個は、アフリカから国籍を変更した選手によるものであった。特に男女の1500m以上の走種目のほとんどはケニアとエチオピアからのランナーが制した。これに加え、短距離種目では元ナイジェリア選手の強さが際立った。男子は、ナイジェリアからカタールに国籍を変更したオグノデが前回大会の200m、400mの金メダルに引き続き、今回は100m、200mで勝った。中でも100mの９秒93 は、アジア記録を大きく上回り、今季世界ランキング５位の記録であった。また、女子の400m、400mハードルで優勝したアデコヤは、大会前の９月10日にIAAFからバーレーンからの出場が許可された選手であった。

日本選手が銀メダルを獲得した12種目のうち４種目が元アフリカの選手に金メダル獲得を阻まれたことになる。IAAFルールでは、国籍を変更してから原則３年でその国の代表としての出場が認められるが、両国が認めた場合には、３年を１年に短縮できるということになっている。この短縮のルールを適用してのアジア大会出場であるので批判できるものでないが、IAAFルールの見直しは必要であると言える。ちなみに、2013年にバーレーンに国籍を変更をしたアフリカ選手は９名、2014年は10名にものぼった。

日本選手の分析

「世界で戦うことのできる力を有する選手」、「2020東京で活躍が期待できる選手」52名（男30名、女22名）を派遣した。「2020東京で活躍が期待できる選手」ということで、ジュニア育成枠で選考した７名のうち４名は８位入賞を果たしており、一応の成果はあげたと評価している。高校、大学時代に水準の高い国際競技大会を経験させることは、その後の国際競技力の向上につながると考えている。

2013年４月から導入した新強化競技者制度では、ゴールドアスリートとシルバーアスリートを指名し、個人強化による重点強化策を展開している。今回のアジア大会では、代表権を獲得できなかった強化競技者や、メダルや入賞に届かなかった競技者が多く出ており、これについては強化委員会による慎重な評価・点検が求められる。重点強化が結果につながらなかった原因やその解決策を明確にすることで、今後の強化策をより良いものにしていきたい。

おわりに

本大会の選考会となった競技会の開催にご尽力いただきました加盟団体および協賛各社、協力団体、活動を支援いただいていますオフィシャルパートナーのアシックス、オフィシャルスポンサーおよびオフィシャルサプライヤーの各社に心から感謝の意を表しますとともに、今後一層のご支援を賜りますようにお願い申し上げます。

強化関連情報

強化委員会

強化新体制について　理事・強化委員長　原田　康弘

2014年11月18日に日本陸上競技連盟強化委員会の新体制がプレスリリースされた。この新体制をスタートさせるにあたり、リオデジャネイロオリンピックに向けて２つの強化方針を定めた。

①北京世界選手権、リオデジャネイロオリンピックに向けて戦える競技者の育成と派遣

②2020年東京オリンピックに向けた選手の育成と強化

なお、これらの方針を可能にするために、さらに以下の点について検討を進めていく必要がある。まず、「①北京世界選手権、リオデジャネイロオリンピックに向けて戦える競技者の育成と派遣」についてである。

○派遣設定記録の設定とそれを用いた選手選考

○強化競技者制度を基にした個人強化の充実

○ナショナルリレーチームおよびナショナルマラソンチームの編成と充実

○海外競技会への積極的な派遣

○医科学、情報戦略の充実と活用

2013年度版競技者育成プログラムにも記載したように、戦える基準として世界ランキング32位を設定した。この記録がこれまでの国際大会の選考要項において設定した派遣設定記録Bである。また、ディベロップメント競技者の基準もこの記録を基準に選定している。したがって、強化委員会ではこの記録を基準のひとつとして選考を行い、選手にはこの記録の突破を一つの目標としていただきたい。なお、戦える基準の設定理由については、2013年度版競技者育成プログラムを参照いただきたい。そして、シニアの強化方針として、個人強化の充実を図っていきたい。世界選手権やオリンピックにおいて活躍を期待するときに、選手がこれらの舞台に慣れていることは重要な要因であろう。そのために、単身での海外競技会への出場を通じて、戦える競技者が育つ場を提供したいと考えている。

また、昨年度からスタートしたナショナルリレーチームおよびナショナルマラソンチームを土台とした強化にも力を入れていきたい。特に、リレー種目は走順に応じて求められる能力が異なり、この能力をレースタイムのみから推し量ることは卓越したコーチといえども容易ではない。また、個々の走力に劣る日本人がリレーにおいて高いパフォーマンスを上げるためには、バトンパスの精度は重要な要因である。したがって、この精度を上げるためにも、ナショナルチームの活動を充実させる必要があろう。

さらに、医科学および情報戦略の活用である。リオに向けた暑熱環境への適応や、世界トップクラスの競技者の動向やパフォーマンス分析は、我々に有用な知見を提供してくれる。したがって、この活用および充実も戦える競技者の育成と派遣のために重要な要因である。

次に「②2020年東京オリンピックに向けた選手の育成と強化」についてである。これまで、効果的なタレント発掘システムの構築について、その必要性は十分に認識されていたものの、この実現に向けて強化委員会主導で検討されたことは少ない。また、専門種目を変更した競技者が、変更後の種目において高いパフォーマンスを発揮する例が散見されるものの、その実態調査や効果的な種目変更について具体的に検討されることもなかった。そのため、東京オリンピックに向けて、タレント発掘システムの構築、およびそのタレント強化システムの構築が急がれる。一方、タレント発掘は普及育成委員会の問題でもあり、種目変更等の実態調査では科学委員会に協力を依頼する必要があるなど、さまざまな委員会で横断的な議論を必要とすることも、これらに関する検討がおろそかになった理由であろう。そのため、新体制では、「2020東京オリンピックプロジェクトチーム」を強化委員会内に設置し、普及育成委員会および科学委員会と連携しながら独立した形で強化施策を検討することとなる。

そして、このような方針のもと、新体制でリオデジャネイロオリンピックに向けて進むこととなった。なお、スタッフについては、次頁一覧表を参照いただきたい。新体制では、副委員長に麻場一徳氏（都留文科大学）および植田恭史氏（東海大学）が新しく就任した。また、男子短距離部長に苅部俊二氏（法政大学）、ハードル部長に櫻井健一氏（国際武道大学）、投てき部長に等々力信弘氏（ミズノ）が就任した。また、シニアの強化をトラック・フィールド部門と中長距離・ロード部門とに分け、それぞれの統括として副委員長の麻場氏および酒井勝充氏（コニカミノルタ）が就任し、ぞれぞれの部門の独立性を高めた。さらに、強化育成部では、アンダー23とアンダー19とに分け、それぞれのディレクターに山崎一彦氏（強化育成部長、順天堂大学）および清水禎宏氏（松江北高等学校）が就任、アンダー19のサブディレクターに石井田茂夫氏（花園高等学校）が就任、それぞれの幹事に遠藤俊典氏（青山学院大学）と大橋祐二氏（帝京平成大学）が就任した。

そして、2020年の東京オリンピック開催が決まって以来、東京オリンピックまでの強化、育成、普及施策について検討を重ねてきたプロジェクトチームを、先述のように強化委員会内に独立させる形で設置し、ここに山崎

一彦氏を起用した。

この11月からスタートする新体制では、トラック・フィールド部門および中長距離・ロード部門のそれぞれに統括を置くことにより、部門ごとの独立性を高めて、現場の意思に即した素早い意思決定を行うことを目的とした。

また、強化委員会内の最終意思決定機関として強化委員会の全メンバーで構成する強化委員会という会議に加えて、委員長である私が招集する諮問機関として強化戦略企画会議を設置した。この会議ではメンバーを固定せず、意見提言を求める内容に応じて必要なメンバーを招集する。なお、必要な場合には強化委員会メンバー以外からも出席を求めて、有識者によるより精度の高い提言をいただけるようにする。これまで、強化委員会という会議で扱う議題はことのほか多く、しかもそれぞれが急を要する議題であった。そのために、先を見据えた議題についての議論をする時間は限られていた。これに対して、強化戦略企画会議では、中長期的な課題について取り上げる。また、課題ごとに小委員会を立ち上げることで、複数の議題について同時に検討を進めることができる。強化戦略企画会議から提言を受け取ることで、よりよい強化施策をスピーディーに実施していくことが可能になるものと考えられる。そして、以下に、今後、強化戦略企画会議において検討を進めていきたい議題について示す。

○ジュニアとシニアの連携

○エリート育成とナショナルチームの活動との調整

○競技会カレンダーの検討

近年、特に女子のスプリント種目においてジュニア世代の競技者の活躍が著しい。10月に行われた仁川アジア大会で銀メダルを獲得した4×400mリレーでは、松本奈菜子選手（浜松市立高校）および青山聖佳選手（松江商業高校）の二人の高校生が活躍した。男子では今年ユージンで開催された世界ジュニア選手権に出場した桐生祥秀選手（東洋大学）も現時点ではジュニア競技者である。このような、シニアの域に達するパフォーマンスを有するジュニア競技者の出現は、現状の強化委員会組織、つまりジュニアとシニアとを異なる枠組みで考えることを見直す必要があることを示している。したがって、ジュニア強化とシニア強化との連携を模索する必要性がある。

次に、エリート育成とナショナルチームの活動との調整である。ナショナルチームでの活動が増えることは、個人での遠征や個人でのトレーニング、つまりエリート育成の時間が不足することを意味する可能性もあり、両者のバランスについて熟考する必要がある。

さらに、競技会カレンダーの検討も重要である。2015年度の競技会カレンダーは例年と比較して変則的で、その理由はワールドリレーズとアジア選手権がそれぞれ5月の初旬と6月の初旬に開催されるためである。そのために、例年のカレンダーでは、4月下旬に開催される織田記念を4月第3週に、日本選手権を6月最終週に変更した。ワールドリレーズをはじめとした国際競技会は、

表1　公益財団法人日本陸上競技連盟　強化委員会

	委員長	原田　康弘	（JOCナショナルコーチ）
	副委員長	麻場　一徳	（都留文科大学）
		酒井　勝充	（コニカミノルタ）
		山崎　一彦	（順天堂大学）
		木内　敏夫	（JOCアシスタントナショナルコーチ）
		植田　恭史	（東海大学）
	幹　事	木越　清信	（筑波大学）
		吉川　三男	（富士通）
		平野　　了	（日本陸連事務局）
●トラック・フィールド部門			
	統　括	麻場　一徳	
	幹　事	木越　清信	
男子短距離	部　長	苅部　俊二	（法政大学）
女子短距離	部　長	瀧谷　賢司	（大阪成蹊大学）
ハードル	部　長	櫻井　健一	（国際武道大学）
跳　躍	部　長	吉田　孝久	（日本女子体育大学）
投てき	部　長	等々力信弘	（ミズノ）
混　成	部　長	本田　　陽	（中京大学）
●中長距離・ロード部門			
	統　括	酒井　勝充	
	幹　事	吉川　三男	
男子長距離・マラソン	部　長	宗　　猛	（旭化成）
女子長距離・マラソン	部　長	武冨　　豊	（天満屋）
中距離	部　長	平田　和光	（自衛隊体育学校）
競　歩	部　長	今村　文男	（富士通）
●強化育成部			
	部　長	山崎　一彦	
アンダー23	ディレクター	山崎　一彦	
	幹　事	遠藤　俊典	（青山学院大学）
アンダー19	ディレクター	清水　禎宏	（松江北高等学校）
	サブディレクター	石井田　茂夫	（花園高等学校）
	幹　事	大橋　祐二	（帝京平成大学）
●2020東京オリンピックプロジェクトチーム			
	ディレクター	山崎　一彦	
	幹　事	遠藤　俊典	
●その他関連部門			
情報部	部　長	石塚　　浩	（日本女子体育大学）

国際陸連のカレンダーを基準に開催のタイミングが検討されていることを考えれば、日本の特性を理解しながらも日本のカレンダーを国際陸連のカレンダーに近づけることで、このような問題は解消されるものと考えられる。また、両者が異なる状況を続けていくことは、エリート競技者の海外転戦を阻害することにもつながり、エリート競技者の個人強化に大きな支障をきたす。そのために、東京オリンピックの強化施策として、日本のカレンダーと国際陸連のカレンダーとが、二つの歯車のようにがっちりと噛み合っていくよう、議論していなかければならない。

このほかにも、多くの課題が浮かび上がっている。これらの課題について、強化戦略企画会議において審議し、よりよい強化施策をスピーディーに実施していきたいと考えている。

リオデジャネイロオリンピックおよび東京オリンピックに向けた強化施策は多岐にわたる。つまり、多くの方々にご協力を頂かなければ両オリンピックにおいて目標を達成することは困難である。2020東京オリンピックプロジェクトチームのディレクターである山崎副委員長が、昨年の全国強化責任者会議の席上にて、「一人一人ができることを考えよう」と呼びかけたことは、このような理由によるものであろう。是非、多くの方々にご理解とご協力をお願いしたい。

「青木半治杯 2014国際千葉駅伝」を終えて

強化委員会幹事　吉川　三男

日時：2014年11月24日（月・振替休日）

場所：千葉県総合スポーツセンター陸上競技場
スタート・ゴール
日本陸上競技連盟公認マラソンコース（42.195km）

1．派遣選手団

スタッフ：監　督　武冨豊（天満屋総監督）
コーチ　佐藤敏信（トヨタ自動車監督）
コーチ　野口英盛（積水化学監督）
総　務　吉川三男（富士通コーチ）

支援コーチ：鈴木秀夫（ユニクロ監督）
高橋昌彦（日本郵政グループ監督）
大八木弘明（駒澤大学監督）

選手（男子）：村山紘太（城西大学）
村山謙太（駒澤大学）
大石港与（トヨタ自動車）
菊地賢人（コニカミノルタ）

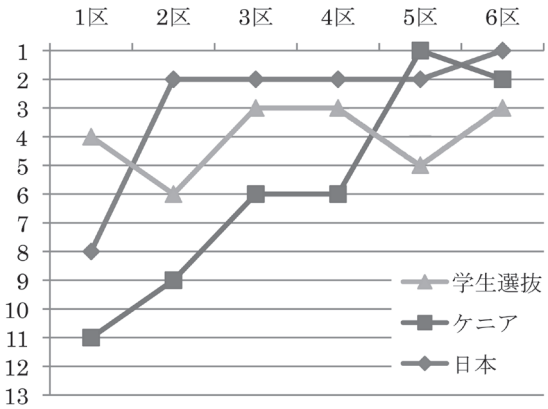
選手（女子）：尾西美咲（積水化学）
松﨑璃子（積水化学）
萩原歩美（ユニクロ）
鈴木亜由子（日本郵政グループ）

2．総合成績　1位　2時間05分53秒

表2　総合成績

区間（距離）	氏名	所属	区間順位	通過順位	タイム
1区（5km）	村山　謙太	駒澤大学	8位	8位	13分45秒
2区（5km）	鈴木亜由子	日本郵政グループ	1位	2位	15分21秒
3区（10km）	村山　紘太	コニカミノルタ	2位	2位	28分39秒
4区（5km）	尾西　美咲	積水化学	4位	2位	16分20秒
5区（10km）	大石　港与	トヨタ自動車	3位	2位	28分46秒
6区（7.195km）	萩原　歩美	ユニクロ	1位	1位	23分02秒
補欠	菊地　賢人	コニカミノルタ			
補欠	松﨑　璃子	積水化学			

【レース経過】



1区

スタート直後から村山謙太選手は先頭グループで走っていたが、中間点を過ぎたあたりから、集団の後方にまわり様子をうかがうような走りであった。3km過ぎでジュリアスヌガリュカ・ヌディク（ケニア）が遅れると、村山選手も遅れだした。村山選手は、中継点でトップのブレット・ロビンソン（オーストラリア）から12秒遅れの8位でタスキを渡した。一色恭志選手（日本学生選抜）は、トップと3秒差での4位で走りきった。

2区

8位でタスキを受け取った鈴木選手は、今期5000mで日本人最高タイムを持っていることから、自信を持った走りで、先頭グループを追い始める。中間点で先頭から6秒差まで縮めると、一気に追走し、3.5km過ぎで集団に追いつく。ラスト200mでエレーナ・コロブキナ（ロシア）との勝負になり、惜しくも7秒程遅れをとったが、3区で待つ村山紘太選手にしっかりとタスキを渡すことができた。鈴木選手は、昨年の快走を彷彿とさせる2年連続区間賞を獲得するすばらしい走りを見せた。4km過ぎまで先頭集団で粘ってい

た、野田沙織選手（日本学生選抜）は、やや遅れながらもトップから20秒差で中継し、先頭の見える位置で踏ん張った。

3区

村山紘太選手は、先頭ロシアのエフゲニー・ルイバコフ（ロシア）に7秒差ということもあり、スプリント選手のような走りで1kmを2分30秒と刻み、あっと言う間に7秒差を詰め追いついた。その後は、最後まで併走し、ラストスパートで競り負けるもトップと3秒差で、惜しくも2位での中継となった。横手健選手（日本学生選抜）は、中間点手前で30秒ほど遅れていたが、最後は21秒差まで詰め6位から3位まで順位を上げるなど力走が光った。

4区

トップのロシアから3秒差でタスキを受けた尾西選手は、すぐに先頭に追いつき併走した。昨年も同区間を走った尾西選手は、落ち着いた走りで3km付近では先頭に立ち走っていたが、4.5km過ぎからアラ・クリアチナ（ロシア）にかわされるも4秒差でタスキを渡した。大森菜月選手（日本学生選抜）は、昨年同区間で区間賞を取ったこともあり、一時は先頭とかなり差を詰めたかのように見えたが、3位のままの中継となった。

5区

アップダウンの激しい区間となる5区は、大石選手も得意とするコースで、終始アナトリー・ルイバコフ（ロシア）の前を走り、レースを組み立てていた。トップから1分差の6位でタスキを受けたケニアのマシュー・キソリオは、平井健太郎選手（日本学生選抜）、カナダ、オーストラリアと次々に抜き、大会の優秀選手となる走りで、7km手前で一気に先頭の大石選手、アナトリー・ルイバコフに追いついた。今大会初めてトップに踊り出たケニアだったが、大石選手は粘りの走りを見せ、マシュー・キソリオに抜かれてからも、上り坂では差を詰めるなど健闘を見せた。6区萩原選手に8秒差の2位でタスキを中継。平井選手は、残念ながら全日本大学駅伝のときのような軽快な走りは影を潜め、5位と順位を落としてしまった。

6区

記者会見では明るい笑顔を見せていた萩原選手だが、レースになると真剣な表情で、先頭ケニアのメルシー・キバルスを追いかける。5年ぶりの優勝を懸け、ケニアを追いかける日本チームアンカーの萩原選手。8秒差で受けたタスキは、メルシー・キバルスが入りの1kmを2分48秒で走っていったため15秒差まで広がる場面もあった。しかし、2km過ぎからはどんどん距離が縮まりはじめ、3km過ぎでついにメルシー・キバルスに追いついた。その後は2人で交互に先頭を引っ張るようなレース展開となるが5kmあたりで萩原選手が突き放した。萩原選手は最後まで気を抜かない走りで圧倒しそのままゴールテープを切った。日本チームは、ケニアの4連覇を阻止すると供に、5年ぶり3回目の優勝を飾った。1区で4位とスタートダッシュに成功した日本学生選抜は、終始先頭グループの見える位置でレースを組み立て、アンカー鍋島莉奈選手が、ロシアのナタリア・ポプコワとの34秒差を逆転し、3位まで押し上げた力走が光った。

【総評】

今回の日本チームは、アジア大会10000mで銅メダルの萩原選手をはじめ、女子選手がチームの中心になっていたように思える。男子は、村山兄弟の強さが先行していた感があるが、チームとして振り返ってみると26歳の大石選手を中心に良くまとまっていた。選手村でも一緒に食事をとるなど、普段はなかなか交流する機会のない男女の選手だが、互いを理解し認め合う雰囲気があり、

日本のアンカーとして、5年ぶりの優勝テープを切った萩原歩美選手

意識の高い選手を集めることができたのではないだろうか。また、補欠ではあったが、アジア大会5000m ５位の松﨑選手、日本選手権5000m ５位の菊地選手がしっかり準備をしてきていたこともチームの雰囲気作りに貢献していたように思える。

レース展開は、１区の村山謙太選手が８位と出遅れたが、それでもわずかに12秒差であったため駅伝では追いつける距離と予測することができた。次走者の鈴木選手が好調であったため、理想的な走りでトップにせまり、日本チームとしては終始レースを作る事ができたと思う。各選手とも、持ちタイムでは自分を上回る外国人選手相手に真っ向から勝負を挑むことで、国際経験を積むことのできた大会となった。それぞれの選手は、大学駅伝、地区実業団駅伝等レースの多い中での出場になったが、前日のチームミーティングでは、武冨監督からも５年ぶりに「勝ちにいく」とはっきり選手に伝え、その思いが選手・スタッフ間で共有されたことも今回の優勝に少なからず影響したと考える。特に支援コーチとしてチーム側面からご協力頂いた鈴木監督（ユニクロ）、高橋監督（日本郵政グループ）、大八木監督（駒澤大学）は、日頃から国内だけでなく、常に「世界」と戦う事を意識させた指導を行うなど、非常にレベルの高い選手を送り出している。今後の長距離・マラソン界は、今回出場した選手達の世代が中心となり、2016年リオデジャネイロオリンピック、そして2020年東京オリンピックへと続いていくと思う。今後も、競技者の皆さんには、常に世界を意識した走りで、日本陸上界を盛り上げていって欲しい。最後に、今回５年ぶりの優勝に際し、快く選手を送って頂いた各チームの指導者並びに関係者の皆様にもこの場をお借りして、御礼申し上げます。

祝福の声に応える日本代表チーム

第１回アジアユース陸上競技選手権大会
（2015／ドーハ）日本代表選手選考要項

大会期日：2015年５月８日（金）～11日（月）
開 催 地：ドーハ（カタール）

１．編成方針

国際競技化に伴う、我が国の競技者における若年層から多くの国際経験を積ませることを目的とする。学校競技会制度を十分に考慮し、高校１年生を中心としたチーム編成とする。

２．参考競技会

2014年度日本陸上競技連盟主催・後援競技会

３．選考基準

（１）トラック＆フィールド種目・競歩
　１）参考競技会の競技成績を基に、強化育成部が推薦する競技者

４．選考方法

選考基準に則り、強化育成部選考会議にて選考原案を作成し、強化委員長及び専務理事が承認する。

５．補足

（１）種目毎の代表はアジア陸上競技連盟が定めるエントリールール以内の人数とする。
（２）リレー種目については、個人種目のエントリー状況などから総合的に判断し、派遣を検討する。
（３）本大会までに故障等により、競技力を発揮できない事態が生じた場合は代表を取消すことがある。

第９回世界ユース陸上競技選手権大会
（2015／カリ）日本代表選手選考要項

大会期日：2015年７月15日（水）～19日（日）
開 催 地：カリ（コロンビア）

１．編成方針

国際競技力の向上よりも国際競技会を通じた経験を重要視する。ユース世代で活躍しているトップ競技者を中心に編成するが、東京オリンピックを見通し、タレントトランスファーを考慮した競技者を選出する。

２．選考競技会

（１）トラック＆フィールド種目
　※下記参考競技会（２）・（３）・（４）・（５）の種目以外
　１）第68回全国高校総体陸上競技大会都道府県及びその支部予選会（2015）
　２）第68回全国高校総体陸上競技大会ブロック予選会（選考会議前日まで）
　３）2015年日本グランプリシリーズ各大会（2015）
　４）第99回日本陸上競技選手権大会（2015／新潟）
（２）男子3000m
　１）第63回兵庫リレーカーニバル
　２）第68回全国高校総体陸上競技大会都道府県及びその支部予選会（2015）
　３）第68回全国高校総体陸上競技大会ブロック予選会（選考会議前日まで）
　※男子3000mについては、２）・３）の男子5000mの結果も考慮する
（３）男女2000m障害物
　１）第63回兵庫リレーカーニバル
（４）男子砲丸投（5.0kg）、男子円盤投（1.5kg）、男子ハンマー投（5.0kg）、女子砲丸投（3.0kg）、女子ハンマー投（3.0kg）
　１）2015日本選抜陸上和歌山大会
（５）競歩
　１）第26回ジュニア選抜競歩大会（2015／神戸）
　２）第54回全日本競歩輪島大会（2015／輪島）

３．選考基準

（１）トラック＆フィールド種目・競歩
　１）選考競技会において強化育成部が定めた派遣設定記録を突破した競技者
　２）選考競技会以外の競技会において派遣設定記録を突破した競技者で、本大会での入賞が期待される競技者
　３）強化育成部が特に推薦する競技者
（２）男子3000m、男女2000m障害物、男女砲丸投、男女ハンマー投、男子円盤投
　１）選考競技会において上位入賞した競技者
　２）強化育成部が特に推薦する競技者

４．選考方法

参加標準記録を満たした競技者の中から、選考基準に則り全ての選考競技会終了後に、強化育成部選考会議にて選考原案を作成し、強化委員長及び専務理事が承認する。

５．補足

（１）種目毎の代表はIAAFエントリールール以内の人数とする。
（２）対象者は1998年、1999年生まれの競技者。
（３）参加標準記録の有効期間は、2014年10月１日から2015年７月６日まで。
（４）選考基準に定める派遣設定記録の有効期間は、本大会の参加標準記録の有効期間に準ずる。
（５）リレー種目については、個人種目のエントリー状況などから総合的に判断し、派遣を検討する。
（６）本大会までに故障等により、競技力を発揮できない事態が生じた場合は代表を取消すことがある。
　※派遣設定記録：過去の世界ユース選手権の記録を基に算出し、６～８位入賞相当記録

功労章・秩父宮章・高校優秀指導者章・中学優秀指導者章・勲功章

2013年度功労章、秩父宮章、高校優秀指導者章、中学優秀指導者章、2014年度勲功章を、第69回国民体育大会陸上競技会の開催期間中の10月19日（日）、国体会場である長崎県・諫早市の長崎県立総合運動公園陸上競技場で授与致しました。下記にて受章者の方々を紹介致します。

表1　2013年度功労章

（年齢・役職等は2014年3月31日現在）

地域	都道府県	氏　名	年齢	役職
関　東	埼　玉	藤間　修一	79	埼玉陸上競技協会名誉会長
近　畿	滋　賀	谷　宇一郎	80	滋賀陸上競技協会顧問
本部	ー	井上　有美	82	日本陸上競技連盟競技運営委員会特別委員

表5　2014年度勲功章

氏　名	所　属	種　目	内　容
谷井　孝行	自衛隊体育学校	50km競歩	第17回アジア競技大会（2014/仁川）優勝
右代　啓祐	スズキ浜松AC	十種競技	第17回アジア競技大会（2014/仁川）優勝
金丸　祐三	大塚製薬	4×400mリレー	第17回アジア競技大会（2014/仁川）優勝
藤光　謙司	ゼンリン	4×400mリレー	第17回アジア競技大会（2014/仁川）優勝
飯塚　翔太	ミズノ	4×400mリレー	第17回アジア競技大会（2014/仁川）優勝
加藤　修也	早稲田大学	4×400mリレー	第17回アジア競技大会（2014/仁川）優勝
松永　大介	東洋大学	10000m競歩	第15回世界ジュニア陸上競技選手権大会（2014/ユージン）優勝
小坂　忠広	石川県立小松特別支援学校	—	谷井孝行の指導者
松田　克彦	名古屋学院大学	—	右代啓祐の指導者
苅部　俊二	法政大学	—	金丸祐三の指導者
安井　年文	青山学院大学	—	藤光謙司の指導者
豊田　裕浩	中央大学	—	飯塚翔太の指導者
礒　繁雄	早稲田大学	—	加藤修也の指導者
酒井　俊幸	東洋大学	—	松永大介の指導者

表2　2013年度秩父宮章

（年齢・役職等は2014年3月31日現在）

No	地　域	都道府県・所属	氏　名	年齢	役職
1975	北海道	北海道	林　義寛	69	北海道陸上競技協会　顧問
1976	東　北	岩　手	土村　雅彦	73	岩手陸上競技協会　副会長
1977	東　北	宮　城	山本　仁	75	宮城陸上競技協会　参与
1978	東　北	福　島	小島　哲哉	74	会津陸上競技協会　顧問
1979	関　東	茨　城	鈴木　敏力	71	茨城陸上競技協会　常任理事
1980	関　東	栃　木	小野　勝敏	69	栃木陸上競技協会　監事
1981	関　東	群　馬	髙橋　賢作	69	群馬陸上競技協会　理事
1982	関　東	千　葉	津嶋　捷志	71	千葉陸上競技協会　監事
1983	関　東	神奈川	瀧川　一輝	70	神奈川陸上競技協会　常任理事
1984	東　京	東　京	大野　弘	73	東京陸上競技協会　理事
1985	北　陸	新　潟	三宮　博己	67	新潟陸上競技協会　副会長
1986	北　陸	富　山	北川　鉄人	79	富山陸上競技協会　顧問
1987	東　海	長　野	細田　完二	66	長野陸上競技協会　理事長
1988	東　海	静　岡	和田　隆保	67	静岡陸上競技協会　会長
1989	東　海	愛　知	若松　良一	68	愛知陸上競技協会　監事
1990	東　海	岐　阜	瀬上　和雄	81	（元）岐阜陸上競技協会　副会長
1991	近　畿	滋　賀	井花　一郎	65	（元）滋賀陸上競技協会　副会長
1992	近　畿	京　都	米井　勝秀	70	京都陸上競技協会　評議員
1993	近　畿	大　阪	譜岐　富男	59	大阪陸上競技協会　常務理事
1994	近　畿	兵　庫	山口　幹夫	61	兵庫陸上競技協会　参与
1995	中　国	鳥　取	伊藤　義寛	66	鳥取陸上競技協会　監事
1996	中　国	岡　山	田村　健兒	76	岡山陸上競技協会　副会長
1997	中　国	広　島	樽谷　和子	66	広島陸上競技協会　事務局長
1998	四　国	香　川	平井　竹幸	69	香川陸上競技協会　副会長
1999	四　国	愛　媛	濱﨑　栄則	64	愛媛陸上競技協会　副会長
2000	九　州	福　岡	八木　雅夫	64	福岡陸上競技協会　専務理事
2001	九　州	佐　賀	高橋　正秀	66	佐賀陸上競技協会　事務局長
2002	九　州	熊　本	星子眞佐郎	70	（元）熊本陸上競技協会　理事
2003	九　州	宮　崎	森　滋	72	宮崎陸上競技協会　理事
2004	本　部	実業団	池田　守男	故人	日本実業団陸上競技連合　副会長
2005	本　部	学　連	金子今朝秋	67	日本学生陸上競技連合　理事
2006	本　部	本　部	横川　浩	66	日本陸上競技連盟　会長
2007	本　部	強　化	武冨　豊	60	日本陸上競技連盟　強化委員会　女子中長距離・マラソン部長
2008	本　部	国　際	田中　克之	72	日本陸上競技連盟　国際委員長
2009	本　部	施設用器具	平塚　和則	65	日本陸上競技連盟　施設用器具委員長

表３　2013年度高校優秀指導者章

（年齢・役職等は2014年3月31日現在）

地域	氏　名	年齢	陸上の地位	指導実績				
				選手名	年	大会名	種目	順位
北海道	梶山　一樹	42	札幌山の手高校陸上競技部　顧問	ー	2013	全国高校駅伝	駅伝	20位
青　森	對馬　庸佑	32	青森県高体連陸上専門部　競技力向上委員	田澤可南子	2012	国民体育大会	砲丸投	2位
岩　手	長沼　晃一	50	岩手陸上競技協会　投擲主任強化委員	高屋敷真悟	2000	全国高校総体	やり投	2位
宮　城	花沢　　元	41	宮城陸上競技協会　強化委員	鈴木　佑弥	2013	全国高校総体	円盤投	1位
秋　田	児玉　弘幸	39	秋田陸上競技協会　強化部長距離部門コーチ	今泉　真人	2007	国民体育大会	100m	3位
山　形	横山　秀郎	45	山形中央高校陸上競技部　投擲コーチ	宮田　　涼	2012	国民体育大会	やり投	2位
福　島	力丸　　弥	55	福島陸上競技協会　理事	宮田　貴志	1996	全国高校総体	100m	1位
茨　城	板倉　俊江	52	茨城陸上競技協会　強化委員	堀江　竜矢	2011	国民体育大会	400m	8位
栃　木	人見　真幸	50	栃木県高体連陸上専門部　委員	齋藤　仁志	2003	全国高校総体	200m	出場
群　馬	春山　晴司	53	太田女子高校陸上競技部　顧問	井桁　　愛	2001	国民体育大会	棒高跳	1位
埼　玉	松本　　肇	54	坂戸西高校陸上競技部　顧問	服部　純哉	2013	全国高校総体	800m	1位
千　葉	郡司昭喜男	61	千葉陸上競技協会　競技運営委員会委員	板鼻　航平	2012	全国高校総体	400m	1位
東　京	青田　雅樹	56	全国高体連陸上専門部　財務委員長	櫻井　紗里	2010	国民体育大会	走高跳	11位
神奈川	鈴木　　充	56	神奈川県高体連陸上専門部　常任委員	山内　　愛	2012	全国高校総体	やり投	2位
山　梨	村田　　繁	44	富士北稜高校陸上競技部　顧問	塚田　和明	2000	関東高校陸上競技大会	やり投	3位
新　潟	廣川　　実	53	東京学館新潟高校陸上競技部　監督	細田　淳史	1993	国民体育大会	やり投	1位
富　山	井山　嗣夫	47	富山県高体連陸上部　競技力向上委員長	東海茉莉花	2005	国民体育大会	円盤投	3位
石　川	木村　哲也	39	石川陸上競技協会　競技部長	神保　祐希	2013	全国高校総体	200m	1位
福　井	長谷川　巧	49	福井陸上競技協会　理事	杉本　　穣	2013	福井県高校総体	やり投	2位
長　野	藤森　　要	41	長野陸上競技協会　普及強化コーチ	内山　成美	2013	全国高校総体	400mH	2位
静　岡	吉田　健一	46	静岡陸上競技協会　強化委員	森　　大樹	2013	全国高校総体	ハンマー投	1位
愛　知	森　　安彦	52	豊川高校駅伝部　監督	ー	2013	全国高校駅伝	駅伝	1位
岐　阜	川瀬　　巧	55	加納高校陸上競技部　顧問	赤松　諒一	2013	全国高校総体	走高跳	3位
三　重	松尾　大介	37	三重陸上競技協会　強化委員	藪根　ゆい	2006	日本ジュニア選手権	走高跳	1位
滋　賀	田尻　隆伸	56	光泉高校陸上競技部　顧問	我孫子智美	2005	国民体育大会	棒高跳	1位
京　都	髙安　和典	55	京都府高体連陸上専門部　記録部員	山本　　遥	2010	国民体育大会	100mH	2位
大　阪	津野　和彦	60	常翔啓光学園高校陸上競技部　顧問	真田　裕之	2011	全国高校総体	棒高跳	9位
兵　庫	武本　益和	55	科学技術高校陸上競技部　顧問	宮本　美穂	2006	全国高校総体	やり投	1位
奈　良	富岡　成嘉	57	大淀高校陸上競技部　顧問	柳川　秀晶	1993	全国高校総体	3000mSC	出場
和歌山	佐藤　寛員	41	和歌山陸上競技協会　強化普及委員会選手強化部員	星畑　朗人	2008	国民体育大会	400m	3位
鳥　取	西田　和弘	44	鳥取陸上競技協会　情報処理部長	廣澤　里佳	2000	国民体育大会	5000mW	2位
島　根	川本　恵美	44	松江商業高校陸上競技部　顧問	青山　聖佳	2013	全国高校総体	200m	2位
岡　山	人部　禎郎	58	岡山陸上競技協会　評議員	森岡　美紅	2012	日本ジュニア選手権	走幅跳	1位
広　島	樋口　裕志	49	広島陸上競技協会　競技運営委員会副委員長	福部　真子	2013	全国高校総体	100mH	1位
山　口	木田　勝久	53	田部高校陸上競技部　顧問	浦山　静奈	2012	全国高校総体	走幅跳	3位
徳　島	栗林美津枝	48	富岡西高校陸上競技部　顧問	米田　研志	2013	四国高校総体	5000mW	9位
香　川	石井　　敦	49	高松東高校陸上競技部　顧問	桒嶋　竹志	2002	国民体育大会	走幅跳	3位
愛　媛	中野　敦之	35	愛媛陸上競技協会　強化委員	野本　周成	2013	国民体育大会	110mH	3位
高　知	小原　昌信	50	安芸地区陸上競技協会　理事長	ー	2013	国民体育大会	4×100mリレー	6位
福　岡	日高　康男	60	城南高校陸上競技部　顧問	児島　有伸	2013	国民体育大会	三段跳	1位
佐　賀	山口　一誠	59	佐賀陸上競技協会　理事	宮本　聖也	2013	国民体育大会	砲丸投	出場
長　崎	阿比留和正	29	長崎陸上競技協会　強化部員	折口　力弥	2013	全国高校総体	走幅跳	1位
熊　本	塩塚　秀夫	59	熊本商業高校陸上競技部　監督	藤岡絵里奈	2010	日本ユース選手権	400m	2位
大　分	西山　祐一	47	大分西高校陸上競技部　部長	松本　晃一	1995	九州新人陸上	800m	8位
宮　崎	甲斐　啓司	44	日南学園高校陸上競技部　顧問	青井　雪菜	2002	国民体育大会	砲丸投	6位
鹿児島	大内山　誠	37	出水商業高校陸上競技部　顧問	兵頭　直弥	2005	国民体育大会	400m	3位
沖　縄	伊志嶺秀行	56	（元）宮古高校陸上競技部　顧問	下地　徳郎	1993	全国高校総体	走高跳	出場

表４　2013年度中学優秀指導者章

（年齢・役職等は2014年3月31日現在）

地域	氏　名	年齢	陸上の地位	指導実績				
				選手名	年	大会名	種目	順位
北海道	佐藤　芳明	51	北海道陸上競技協会　評議員	八重樫一也	2013	全日本中学	1500m	2位
青　森	飛内美沙緒	26	青森県中体連陸上専門部　強化コーチ	山口　光	2013	ジュニアオリンピック	800m	1位
岩　手	髙橋　勝彦	50	岩手県中体連陸上専門部　強化スタッフ	並岡　真生	2013	全日本中学	棒高跳	5位
宮　城	藤原　健良	53	宮城県中体連陸上専門部　専門委員	多田　紅子	2005	東北中学陸上	四種競技	1位
秋　田	柴田　仁	55	秋田県中体連地区陸上専門部　委員	佐藤　駿真	2013	全日本中学	110mH	5位
山　形	横澤　聡一	43	山形県中体連陸上専門部　常任委員	菊地　葵	2013	ジュニアオリンピック	200m	4位
福　島	中山　芳文	50	福島陸上競技協会　理事	布川　輝	2013	全日本中学	砲丸投	1位
茨　城	渡邉　健司	46	（元）茨城県中体連陸上専門部 委員長	塚本　侑子	2003	ジュニアオリンピック	ジャベリックスロー	4位
栃　木	櫻井　輝之	50	真岡中学校陸上競技部　顧問	渡邉　仁	2010	全日本中学通信陸上大会	1500m	1位
群　馬	加藤　雅史	46	富士見中学校陸上競技部　顧問	樺沢和佳奈	2013	国民体育大会	1500m	1位
埼　玉	山下　豊	52	中央中学校陸上競技部　顧問	大野　勝	1988	ジュニアオリンピック	100m	1位
千　葉	藤鷹　昭宏	51	木刈中学校陸上競技部　顧問	谷藤　克樹	2013	全日本中学	四種競技	1位
東　京	市村　光雄	54	西戸山中学校陸上競技部　顧問	長沼　瞳	2012	全日本中学	砲丸投	1位
神奈川	大場　一子	54	神奈川陸上競技協会　総務委員会女性部長	谷口耕太郎	2010	全日本中学	200m	7位
山　梨	高橋　修	45	吉田中学校陸上競技部　顧問	小林未加子	2009	全日本中学	四種競技	出場
新　潟	熊倉　史也	49	長岡市陸上競技協会　理事	池田ブライン雅樹	2011	全日本中学	400m	3位
富　山	五十里慶子	51	富山県中体連陸上専門部　委員	安守　久恵	1988	全日本中学	100m	4位
石　川	安中　貴行	38	石川陸上競技協会　強化部員	秋田　理沙	2011	全日本中学	100m	1位
福　井	八田　天	46	福井陸上競技協会 強化副委員長	真柄　碧	2011	全日本中学	800m	8位
長　野	名取　充	48	長野県中体連陸上部　中信地区専門委員	赤羽純美玲	2013	北信越中学	800m	1位
静　岡	佐々木茂雄	39	静岡県中体連陸上専門部　強化委員	小野田吏紗	2012	ジュニアオリンピック	走幅跳	1位
愛　知	久米　裕朗	41	愛知陸上競技協会　理事	阪野　裕子	2001	全日本中学	100mH	2位
岐　阜	平岩　徹	50	西中学校陸上競技部　顧問	谷口真一郎	1998	ジュニアオリンピック	走幅跳	8位
三　重	加藤　邦佳	36	多気中学校陸上競技部　顧問	小林　俊介	2013	全日本中学	棒高跳	1位
滋　賀	髙田　毅	50	滋賀陸上競技協会　理事	武田　凌也	2006	ジュニアオリンピック	100m	6位
京　都	小長谷道仁	60	京都府中体連陸上専門部　委員	倉　貴己	2005	全日本中学	400m	出場
大　阪	松川　良紀	57	大阪陸上競技協会　理事	松原　拓矢	2009	全日本中学	砲丸投	出場
兵　庫	藤原　健秀	54	大原中学校陸上競技部　顧問	谷　浩二朗	2007	全日本中学	四種競技	2位
奈　良	島﨑　智弘	54	光陽中学校陸上競技部　顧問	森脇　優	1999	全日本中学	砲丸投	5位
和歌山	玉置　純一	53	東中学校陸上競技部　顧問	宮本美智留	2011	近畿中学	200m	3位
鳥　取	坂口　英樹	49	鳥取陸上競技協会　理事	生原　幸太	1993	全日本中学	三種競技B	3位
島　根	奥井　克己	45	第一中学校陸上競技部　顧問	花田　達也	2013	全日本中学	100m	2位
岡　山	森　浩子	53	岡山県中体連陸上専門部　会計	片岡　紗希	2003	ジュニアオリンピック	200m	4位
広　島	平賀　靖弘	51	東広島中体連　理事	吉田　圭太	2013	ジュニアオリンピック	3000m	2位
山　口	山本　英子	45	山口県中体連陸上専門部　委員	宮崎　大宇	2010	全日本中学	400m	4位
徳　島	井藤　広章	53	北井上中学校陸上競技部　顧問	喜多　世奈	2011	ジュニアオリンピック	走幅跳	2位
香　川	笠嶋　裕志	48	三豊観音寺地区競技部長	今宮　翼	2000	全日本中学	三種競技B	1位
愛　媛	黒田　敏子	58	北郷中学校陸上競技部　顧問	馬越　興平	2001	ジュニアオリンピック	400m	2位
高　知	山本　多江	56	高吾地区陸上競技協会　専門部員	岡　亮佑	2012	全日本中学	走幅跳	出場
福　岡	坂井　英明	53	大牟田市陸上競技協会　副理事長	馬場菜々美	2010	全日本中学	走高跳	出場
佐　賀	吉牟田浪路	51	唐津東中学校陸上競技部　顧問	本山　智菜	2013	九州中学	100m	6位
長　崎	久田　敏幸	66	長崎陸上競技協会　理事	山口　大我	2012	ジュニアオリンピック	110mH	2位
熊　本	森田　琢二	47	第二中学校陸上競技部　顧問	齊藤　勇真	2013	全日本中学	110mH	2位
大　分	山路　康弘	40	鶴見台中学校陸上競技部　顧問	足立紗矢香	2011	ジュニアオリンピック	100m	2位
宮　崎	安在　倫孝	42	宮崎陸上競技協会　評議員	前野　舞	2010	ジュニアオリンピック	ジャベリックスロー	2位
鹿児島	住本真一郎	45	鹿児島陸上競技協会　強化部支援スタッフ	山中　亮磨	2008	全日本中学	走高跳	1位
沖　縄	當間　五弥	48	粟国中学校陸上競技部　顧問	照屋　陽	2012	九州中学	砲丸投	出場

第10回全国小学生陸上競技交流大会優秀選手「研修会」報告

普及育成委員会　井筒　紫乃

“日清食品カップ”第30回全国小学生陸上競技交流大会（2014年８月22～23日・横浜日産スタジアム）決勝進出者の中から優秀選手を選出し、将来の有望選手としての意識・意欲（モチベーション）づけと、その指導者に陸上競技の一貫指導（発育発達に応じた指導）の重要性を理解してもらうために、日産スタジアム（神奈川県横浜市）で開催されていた「第45回ジュニアオリンピック陸上競技大会兼第98回日本陸上競技選手権リレー競技大会」を観戦するとともに、研修会ならびに選手の体力・陸上競技に関する測定を実施し、予定通り無事終了することができた。実施内容を以下のとおり報告する。

１．日程および場所

2014年11月１日（土）～２日（日）１泊２日

１日：横浜市スポーツ医科学センター（形態および体力測定）、新横浜プリンスホテル（測定結果説明および交流会）

２日：新横浜プリンスホテル（選手：栄養研修会および交流会、指導者：情報交換会）、横浜日産スタジアム（「第45回ジュニアオリンピック陸上競技大会兼第98回日本陸上競技選手権リレー競技大会」観戦）

２．参加者

「“日清食品カップ”第30回全国小学生陸上競技交流大会」において決勝進出者の中から６年100m（男子７名・女子６名）・80mH（女子２名）・走幅跳（女子１名）を選出し、選抜された16名の選手と、それぞれの選手の指導者16名、総計32名が参加した（参加者名簿参照）。なお、参加者には事前に「中学校で継続して陸上競技を行う」、「将来オリンピック選手になりたいという意欲（高いモチベーション）を持っているもの」、「５・６年生の新体力テストの結果の提出と今後日本陸連の調査等に協力できること」を条件として打診し、全参加者から理解が得られた。

〈指導者・選手リスト〉

男子　種目	県名	選手氏名	指導者氏名
男子６年100m	群　馬	赤石　健	岩木　佑太
	秋　田	越後　瀬那	千葉　慎吾
	茨　城	中山　琉唯	中山　　実
	栃　木	渡邊勇汰郎	渡邊　早苗
	静　岡	平野　智也	橋本末紀也
	東　京	大脇　理雄	高橋　　誠
	奈　良	中矢　智也	田中　一次
女子　種目	**県名**	**選手氏名**	**指導者氏名**
女子６年100m	三　重	須川　真衣	東　　宏明
	静　岡	田村　瑠那	田村　和彦
	愛　知	新庄　理子	鈴木　広明
	愛　媛	佐伯　夏名	山之内知弘
	滋　賀	安達　茉鈴	宮野　美紀
	北海道	中山　璃子	奥村　正則
女子６年80mH	東　京	篠山　結夏	鈴木　　威
	北海道	石堂　陽奈	石堂　竜二
女子６年走幅跳	福　島	齋藤　珠理	菊田　明博

３．役員および講師

〈ゲスト講師〉桐生祥秀選手（東洋大学）、福島千里選手（北海道ハイテクAC）

〈栄養研修会講師〉大畑好美（普及育成委員会U-16育成部委員）

〈スタッフ〉繁田進（普及育成委員長）、渡部誠（普及育成部長）、森健一（普及政策部幹事）、豊田裕浩（普及育成部U-16担当幹事）、井筒紫乃（普及育成部U-13担当幹事）、大畑好美（普及育成部委員）、岸政智（普及育成部委員）、陸連事務局

４．詳細スケジュール

11月１日（土）

13：00　役員集合・打ち合わせ（日産スタジアム）

13：45　選手・指導者集合

14：00　〈開講式〉（横浜市スポーツ医科学センター測定室）
開講挨拶（渡部普及育成部長）、日程説明（岸普及育成部委員）、着替え・準備

14：10　〈測定〉測定に関する説明（横浜市スポーツ医科学センター・吉久武志研究員）
測定項目：身長・体重・体脂肪率・骨量・骨年齢レントゲン・足圧・走動作撮影

15：30　測定終了、ジュニアオリンピック観戦後、送迎バスにて新横浜プリンスホテルへ移動

18：00　夕食

19：00　〈研修会〉司会：豊田委員
桐生祥秀選手・福島千里選手を迎えてのディスカッション（質疑応答）・写真撮影

20：20　〈測定結果説明会〉横浜市スポーツ医科学センター・吉久研究員より測定結果の説明

20：50　終了・解散

11月２日（日）

07：00　朝食

09：00　研修会
選　手：栄養研修会（大畑普及育成部委員）
交流会（福島千里選手）
指導者:意見交換会（座長:渡部普及育成部長）

11：00　〈閉講式〉挨　拶：繁田普及育成委員長
～終了後、「ジュニアオリンピック大会兼日本選手権リレー競技大会」観戦
選手・指導者の帰省時間に合わせて順次解散

以上、全日程終了

5．まとめ

本研修会も10回目の開催となり、この研修会に参加した選手が中学に進学し、ジュニアオリンピックや国体等で活躍する姿も見られるようになってきた。参加条件に理解が得られた選手16名、指導者16名の計32名の参加者があった。

測定においては、横浜市スポーツ医科学センター・吉久研究員やセンター員のご協力でスムーズに行うことができた。選手同士もすぐに打ち解け、楽しそうに交流するとともに、積極的に測定に取り組んでいた。また指導者も熱心に測定を見学していた。

ホテルでの夕食は和気あいあいと楽しい時間を過ごしていた。「研修会」においては、今年度の日本選手権100m男女の優勝者（桐生祥秀選手・福島千里選手）をゲスト講師に迎え、選手もこの時間を楽しみにしていたようだった。まず豊田委員より両選手に「どんな小学生時代だったか？」という質問があり「サッカーや野球をしていた。遠投が得意で今でも100m近くは投げられると思う。」（桐生選手）、「夏は陸上競技、冬はスピードスケート競技を行っていた。」（福島選手）との回答があった。また、「スパイクはどのようなものを履いていますか？」という質問に、「軽さを重視」（桐生選手）「自分が気に入ったもの」（福島選手）に加え「いつも練習は土のグラウンドだった。坂をよく利用して練習していた。」（福島選手）、「練習ではほとんどスパイクを履かない。小学生の頃は芝生で走る方がよいと思う。」（桐生選手）のアドバイスがあった。ミニハードルやマークを使った練習の話題になると、選手達も熱心にメモをとっていた。最後に「小学生の頃は陸上のことばかりだけではなく、鬼ごっこなど走ることを楽しんでほしい」（桐生選手）、「ここでの出会いを大切に。中学･高校･大学に行ってもこのメンバーで戦えるように。」（福島選手）という言葉が選手達に贈られた。最後に、桐生選手・福島選手を囲み、参加者全員で記念撮影を行った。

その後、横浜市スポーツ医科学センターの吉久氏より測定についての説明が行われた。今回も昨年同様、午後に行われた測定の結果が迅速にデータ化・資料化され、この説明会においてそれぞれの参加者にデータが配布された。そして、その個人データに基づいた即時のフィードバックがなされた。

翌日は、９時00分よりホテル内の研修室において、指導者・選手の二手に分かれての研修会を行った。

指導者研修会においては、はじめに日本陸連が作成した「モチベーションビデオ」が上映され、その後それぞれの指導者、保護者から自己紹介と今の活動についての報告がなされた。「指導者の後継者がいない」「資金不足」「同じ県内であっても地域によって中体連や小学校との連携がとれているところととれていないところの差がある」「専門種目の指導者がいない」「進学先の中学に陸上部がない」などの問題点があげられた。また「保護者と選手、指導者で良い関係が保たれている」「地元の学生が常時ボランティアで参加している」といったプラスの意見も出された。１時間半という時間がとても短く感じられるほど指導者の熱い思いが伝わり、現場の活動状況を把握する上では、大変有意義な研修会であった。

選手においては、大畑普及育成委員により「小学生のスポーツと栄養」についての講義が行われた。その中で、「昨日の夕食と今朝の朝食で何を食べたか？」という質問が出され、選手達は一生懸命思い出しながら記入していた。「主食・主菜・副菜・乳製品・果物」の５種類を食べる、おやつはお菓子ではなくエネルギー源となるバナナ、パン、ご飯がよいといった内容で進められた。また、ゲストの福島選手も一緒に参加し、交流を行った。

その後、渡部普及育成部長の挨拶で閉講式を終え、横浜日産スタジアムで行われているジュニアオリンピック観戦となった。

10回目となった本研修会は、男子に関しては種目を100mに特定し入賞した７名、女子については、100m６名、80mH ２名、走幅跳１名を選抜した。走種目の小学生優秀選手の特性をみることができたと考えられる。今後も、今までに得られたデータをもとに小学生交流大会の種目の検討や追跡調査を行っていかなければならない。また、現場の現状を把握し、陸上競技人口を増やしていくためにも今後もこの研修会を継続していきたいと考えている。

最後に、測定およびデータの提供をしていただいた横浜市スポーツ医科学センターの吉久研究員とスタッフの皆さまに感謝致します。

桐生選手、福島選手を囲んでの記念撮影

吉久氏からの測定説明

大会観戦ガイド

男子第65回　女子第26回 全国高等学校駅伝競走大会

師走の都大路を走る全国高校駅伝。今年、優勝するのはどこのチームになるでしょうか。是非、沿道、競技場で応援ください！

65回の記念大会を迎える男子は、地区代表校11校を加えて58校での争いになります。

▼日時：2014年12月21日（日）
　女子 10：20スタート
　男子 12：30スタート

▼会場（スタート・フィニッシュ）：京都府・京都市西京極総合運動公園陸上競技場

▼アクセス：西京極総合運動公園陸上競技場
・阪急電鉄京都線西京極駅から徒歩５分
・京都市バス32号・73号・80号系統「西京極運動公園前」下車徒歩５分

▼区間・コース：
〈男子〉男子全国高校駅伝コース７区間42.195km
・第１区　10km（西京極陸上競技場－烏丸鞍馬口）
・第２区　３km（烏丸鞍馬口－丸太町河原町）
・第３区　8.1075km（丸太町河原町－国際会館前）
・第４区　8.0875km（国際会館前－丸太町寺町）
・第５区　３km（丸太町寺町－烏丸紫明）
・第６区　５km（烏丸紫明－西大路下立売）
・第７区　５km（西大路下立売－西京極陸上競技場）
〈女子〉女子全国高校駅伝コース５区間21.0975km
・第１区　６km（西京極陸上競技場－平野神社前）
・第２区　4.0975km（平野神社前－烏丸鞍馬口）
・第３区　３km（烏丸鞍馬口－室町小学校前折返し－北大路船岡山）
・第４区　３km（北大路船岡山－西大路下立売）
・第５区　５km（西大路下立売－西京極陸上競技場）

▼テレビ放映予定：NHK 総合テレビ　12月21日（日）
10：05～11：54（女子）、12：15～14：55（男子）

▼ラジオ放送予定：NHKラジオ第一　12月21日（日）
10：05～11：55（女子）、12：15～15：00（男子）

▼大会公式ページ：http://www.koukouekiden.jp/

▼問合せ先：全国高等学校駅伝競走大会事務局
（京都府立北嵯峨高等学校）
TEL／FAX 075-865-2700

4校によるトラック決戦となった前回大会の男子

前回大会の女子は、豊川が最多4度目の優勝

皇后盃 第33回
全国都道府県対抗女子駅伝競走大会

新春の都大路で競う皇后盃全国女子駅伝。47都道府県を代表する中学生から一般までの選手に、是非、沿道、競技場でご声援ください！

▼日時：2015年1月11日（日）　12：30スタート
▼会場（スタート・フィニッシュ）：京都府・京都市西京極総合運動公園陸上競技場
▼アクセス：西京極総合運動公園陸上競技場
・阪急電鉄京都線西京極駅から徒歩５分
・京都市バス32号・73号・80号系統「西京極運動公園前」下車徒歩５分
▼区間・コース：９区間42.195km
・第１区　６km（西京極陸上競技場－平野神社前）
・第２区　４km（平野神社前－烏丸鞍馬口）
・第３区　３km（烏丸鞍馬口－丸太町河原町）
・第４区　４km（丸太町河原町－北白川山田町）
・第５区　4.1075km（北白川山田町－国立京都国際会館前）
・第６区　4.0875km（国立京都国際会館前－北白川別当町）
・第７区　４km（北白川別当町－丸太町寺町）
・第８区　３km（丸太町寺町－烏丸紫明）
・第９区　10km（烏丸紫明－西京極陸上競技場）
▼テレビ放映予定：NHK 総合テレビ
１月11日（日）12：15～
▼ラジオ放送予定：NHK ラジオ第一
１月11日（日）12：15～
▼大会公式ページ：http://www.womens-ekiden.jp/
▼問合せ先：
皇后盃全国都道府県対抗女子駅伝競走大会事務局
（京都新聞COM事業局内）
TEL 075-213-0367／FAX 075-241-5271

前回の皇后盃全国女子駅伝のスタート風景

天皇盃第20回
全国都道府県対抗男子駅伝競走大会

新春の安芸路で競う天皇盃全国男子駅伝。47都道府県を代表する中学生から一般までの選手に、是非、沿道でご声援ください！

▼日時：2015年１月18日（日）12：30スタート
▼コース：広島市平和記念公園前を出発、平和大通り、宮島街道を西進し、JR前空駅東（廿日市市大野）前を折り返し、平和大通り、城南通りを経由、広島市平和記念公園前を決勝とする７区間、48.0kmのコース。
▼アクセス：広島市平和記念公園
JR広島駅から南口バス乗り場A-3ホームより、広島バス24号線吉島営業所または吉島病院行き「平和記念公園」下車、広島電鉄「袋町」下車徒歩５分、「原爆ドーム前」下車徒歩５分
▼区間・コース：７区間48.0km
・第１区　７km（広島市平和記念公園前－広電井口駅東）
・第２区　３km（広電井口駅東－海老園交差点）
・第３区　8.5km（海老園交差点－宮島口ロータリー）
・第４区　５km（宮島口ロータリー－JR前空駅東折り返し－JR阿品駅南）
・第５区　8.5km（JR阿品駅南－広島工大高前）
・第６区　３km（広島工大高前－草津橋）
・第７区　13km（草津橋－平和大通り・城南通り経由－広島市平和記念公園前）
▼テレビ放映予定：NHK 総合テレビ
１月18日（日）12：15～
▼問合せ先：天皇盃全国男子駅伝事務局
TEL 082-292-0601／FAX 082-292-0680
▼大会ホームページ：http://www.hiroshima-ekiden.com/

前回の天皇盃全国男子駅伝1区のレース風景

JAAF HOKKAIDO 一般財団法人北海道陸上競技協会

〒003-0626　札幌市白石区本通5丁目南4番11号
KJビル3号棟2階205
TEL.011-598-7407　FAX.011-598-7408
http://hokkaido-rikkyo.jp/

2014年北海道陸協主催の大会は11月3日文化の日、札幌市内にある国営滝野すずらん公園内特設コースを会場に小学生の「ちびっ子駅伝大会」で予定された競技会は全て終了しました。道内各地から参加した小学生は、時折吹雪模様になる悪天候にもめげず元気いっぱいの走りで2014年の大会を締めてくれました。

2014年の北海道選手の活躍は、小学生、中学生、高校生、大学生、社会人とそれぞれの分野で活躍し、全国小学生交流大会で二人の優勝者と五人の入賞、全日本中学では優勝1、入賞4、インターハイでは、優勝1、入賞9の成績を果たし、やり投・北口榛花選手（旭川東高校2年）は、日本ユース・国体少年共通と三冠の快挙を遂げました。大学生では、増野元太選手（国際武道大学3年）が、110mHで初の日本選手権を獲得し、金井大旺選手（法政大学1年）は、110mHジュニア日本記録を樹立し、城山正太郎選手（東海大学北海道2年）は、世界ジュニア選手権で、銅メダルを獲得しました。

社会人選手の活躍は、福島千里選手（北海道ハイテクAC）が、日本選手権100m・200m 2冠の4連覇、国体100m連覇、アジア大会100m・200mでメダルを獲得。現在はスズキ浜松ACで活躍の右代啓祐選手（札幌第一高校出身）の十種競技での金メダルは、北海道の誇りで、11月6日に高橋はるみ北海道知事から「感謝状」が贈られました。

改修中でありました札幌厚別公園競技場は、サブグランド、本競技場の改修も終わり、IAAFクラス2の認定も受けました。

JAAF IWATE 一般財団法人岩手陸上競技協会

〒020-0822　盛岡市茶畑2-8-27
TEL.019-621-8460　FAX.019-656-9006
http://long-distance.jp/iwate/

名峰岩手山にも初雪が降り、本格的な冬に向けて季節が移り変わろうとしています。

大会関係も終盤になり、トラック競技は一大会を残し、トラックシーズンからロード関係の大会を迎える時期に移ります。

さて、「長崎がんばらんば国体」では、成年男子800mで田中匠瑛選手（盛岡市役所）が優勝、10000m競歩で高橋英輝選手（岩手大学）が準優勝、少年男子共通800mで櫻岡流星選手（盛岡南高校）、5000m競歩で高橋和生選手（花巻北高校）が3位等、10種目に入賞者を出し昨年を上回る活躍で大会を締めくくることができました。

2年連続で優勝者が出たことは関係者として大いに賞賛される大会となりました。

また、先日開催された第45回ジュニアオリンピックでは男子C中学1年1500m決勝で、佐々木塁選手（盛岡・河南中学校）が4分04秒00の圧倒的な強さで中学1年日本最高記録を更新する素晴らしい走りで優勝、男子A3000m・8分38秒98で佐藤慎巴選手（北上中学校）、女子A200m・24秒96で山田美来選手（福岡中学校）が準優勝と若い選手も力をつけており、来シーズンの活躍と、2年後の「希望郷いわて国体」の中心選手としての活躍が大いに期待されると同時に今後の成長を温かく支援強化して行きたいと考えています。

協会としても来年度は、「希望郷いわて国体」のリハーサル大会等本格的な準備に取り掛かるシーズンになり、多忙な1年になることが予想されています。

JAAF AOMORI 一般財団法人青森陸上競技協会

〒038-0021　青森市安田字近野234-7
青森総合運動公園陸上競技場内
TEL.017-766-5457　FAX.017-782-5154
http://www.jomon.ne.jp/~arikkyo/

11月16日の長距離記録会をもって、2014年度の県陸協主催の競技会は全て終了いたしました。10月に長崎県諫早市で行われた国体は400mハードルの岸本鷹幸選手の欠場もあり総合42位で終わりました。11月9日福島県で開催された東日本女子駅伝の成績は、タイム的には今までの最高記録でしたが順位は14位で終わりました。本協会は今年度90周年を迎えることができました。記念誌の発行、式典及び祝賀会を2015年2月22日青森市において挙行することになりました。協力団体であります青森県マスターズ連盟も30周年を迎えることができました。式典と祝賀会を11月22日に開催しました。

平成29年度完成予定の新陸上競技場の計画は1回目の入札業者はなく、予定が大幅に遅れるのではないかと危惧しております。また、現在の青森市にある県営陸上競技場は、公認1種の条件を満たすことができないため、来年の5月に2種に降格しての検定となります。このため、2015年度青森県春季選手権が青森市でできない状態にあり、弘前市での実施の方向で検討しております。27年度には、東北高校新人が青森県で開催の予定であり、今後三年間東北規模の大会が予定されているので競技場の整備を急いで進めていく必要にせまられております。今年度の各競技会においては、全国的に活躍する選手が少なく選手強化の見直しが求められており、12月には競歩の県外合宿・駅伝の強化合宿。1月には各ブロックの合宿及び練習会。2月には沖縄での県外合宿等を実施の予定です。

（文責：理事長　安田信昭）

JAAF MIYAGI 一般財団法人宮城陸上競技協会

〒981-0122　宮城郡利府町菅谷字舘40-1　宮城県総合運動公園内
TEL.022-767-2194　FAX.022-767-2194
http://jaaf-miyagi.com/

トラックシーズンが終了。ロードレース、駅伝競走大会が県内各地で盛んに開催されております。10月12日には日本の景勝地松島町で「がんばろう東北！ 第38回松島ハーフマラソン大会」を8,500人の参加を得て、東日本大震災の被災地のコースを走り、地元の人達に元気を与えることが出来ました。

また、10月26日には第32回全日本大学女子駅伝対校選手権大会を仙台市陸上競技場スタート、仙台市役所市民広場にフィニッシュする6区間38kmのコースで実施しました。全国の予選会を突破した25チーム、東北学連選抜のオープン参加を含めた計26チームで多くの仙台市民の応援のもと健脚を争いました。仙台市に大会を移して10回目となったこの大会を記念して「杜の都仙台市小学校たすきリレー大会」も開催し、大いに盛り上がりをみせました。

11月中旬には県の男子・女子駅伝競走大会も例年通り実施いたしました。

更に、12月14日には第34回全日本実業団対抗女子駅伝競走大会を松島町から仙台市までの6区間42.195kmで実施します。日本の女子長距離のトップ選手が走ることで、多くの人達が楽しみに待っている大会になる様目指しております。

まだまだ震災の影響で厳しい環境が続いておりますが頑張ってまいります。

（文責：理事長　殿内信一）

陸協NEWS

JAAF AKITA 秋田陸上競技協会

〒011-0911　秋田市飯島字飯島水尻454-3
TEL.018-845-0099　FAX.018-845-0099
http://akita-riku.fiw-web.net/

競技力向上対策について

低迷するスポーツ界の競技力向上対策の一環として、社会人チームの少ない当県の現状を踏まえ、ジュニア層の強化が急務だった。その対策として、県・県教育長・県体協の三者協議により始まった秋田県高等学校強化拠点校事業が５年を経過し、見直しをすることとなった。

全国規模の大会において、ベスト４以上の成績を目指すことには変わりはないが、大きく変わったことは、高等学校による公募制となったことである。過去の実績にとらわれすぎて結果が伴わない学校には厳しいものとなる。

幸いにして、陸上は個人性が強いが、独自のジュニア対策もあって例年全国規模の大会に入賞者を出しているから、評価は低くない。現在、男子校１校に女子高を加えた数校の公募が予定されている。加盟競技団体の推薦が必要となるので、強化拠点校に偏った強化にならないよう、チェック体制を整えながら制度を活用した強化対策の充実を図っていく。

（文責：理事長　鈴木文男）

JAAF FUKUSHIMA 福島陸上競技協会

〒960-8135　福島市腰浜町3-41
TEL.024-534-0331　FAX.024-534-0339
http://gold.jaic.org/fukushima/

トラックシーズンが終わり、駅伝・ロードレースのシーズンに入っております。

当陸協共催の鶴ケ城ハーフマラソン（会津若松市）、円谷幸吉メモリアルマラソン（須賀川市）、猪苗代ハーフマラソン（猪苗代町）が10～11月上旬で終了し、昨年度大雪のため中止になり関係する皆様方にご迷惑をおかけした、いわきサンシャインマラソン（いわき市）が２月に開催されます。また、主管した東日本女子駅伝、群馬県の優勝で終了。福島県民が一番盛り上がる市町村対抗福島県縦断駅伝競走大会が、11月16日に白河市～福島県庁までの95.1km、16区間で実施し、市の部でいわき市、町の部で猪苗代町、村の部で西郷村がそれぞれ優勝しました。沿道には沢山の県民が応援にかけつけてくれました。この駅伝から多くの日本を代表する選手が育っており普及強化に大きく貢献している大会でもあります。

今後開催される、全国中学男女駅伝・全国高校男女駅伝、全国都道府県男女駅伝での活躍を楽しみにしているところです。

今年度の一番は雨天の中開催された第98回日本選手権大会が一番の思いで深い大会だと考えます。

協会としてはこれから今年度の反省総括、次年度に向けての準備等、息の抜けない日々になるものと覚悟しています。

（文責：理事長　佐藤勇）

JAAF YAMAGATA 一般財団法人山形陸上競技協会

〒994-0103　天童市大字川原子1445番地の2
TEL.023-657-3070　FAX.023-665-5579
http://jaaf-yamagata.jp/

県内高校を卒業し大東文化大学に進学した木村芙有加選手が、二つの世界大会に日本代表として出場し、それぞれ入賞いたしました。一つ目は、１学年時の平成26年３月22日ウガンダ共和国エンデベで開催された第19回世界大学クロスカントリー選手権大会で５位に、もう一つは、２学年時の平成26年７月23日アメリカ・ユージンで開催されたIAAF世界ジュニア陸上競技選手権大会女子5000mで８位に入賞したものです。

４月からのトラックシーズンを11月で無事終了することができました。その中で、７月12、13日に開催した第67回山形県陸上競技選手権大会時に、平成29年度開催の南東北インターハイに向けて、日本陸連の協力を得て、アナウンサー研修を実施したこと、山形県教育委員会等の支援のもと、ジュニア強化事業を行うことができました。特にジュニア強化で成果が見られ、インターハイでは入賞者の増加、全中大会に昨年までは数名の参加でしたが、今年度は20数名が出場いたしました。また、日本ジュニア・ユース大会でも優勝・入賞がありました。ジュニアの強化が実っているものです。

11月からのロードシーズンでは、県女子駅伝等駅伝大会やロードレース大会が開催されます。特に１月の下旬に開催されます冬季ロードレース大会は、激寒の中での大会として県内長距離選手が多く参加し、力走いたします。

２月以降になると理事・評議員の改選期を迎えるため、会議の準備に忙しくなりそうです。

（文責：常務理事　阪口新一）

JAAF IBARAKI 茨城陸上競技協会

〒311-4151　水戸市姫子2-349-13　潮田茂様方
TEL.029-253-4661　FAX.029-291-5362
http://irk.bent.jp

晩秋の装いを色濃く映し出す今日この頃ですが、関係各位のご協力によりまして、本県の今年度トラック競技会の全日程を滞りなく終了しました。その総決算ともいうべき長崎国体では、11種目に入賞、天皇杯得点55点を獲得、天皇杯順位16位という成績を収めることができました。過去二年間20位台に甘んじていただけに、これも一つの躍進と捉えております。また茨城国体5年前の節目を迎え、競技力向上に力点を注ぐ本県にとって、今後の強化対策に大いに弾みを付ける結果でもありました。今年度成績をベースに、年次、前年度成績を上回ることを目標に掲げ、来たるべき茨城国体では、是非とも好成績を収めたいと考えています。

競技運営面を視野に入れると、諸般の事情でまだ担当市町村が決まらないものの、会場地は本県陸上競技のメッカともいうべき笠松運動公園陸上競技場開催が決定しています。笠松は緑豊かで広大な敷地面積を誇る競技場であり、メイン競技場を中心にサブトラック、投てき場が至近距離にあるなど、極めて利便性の高い、競技者志向の仕様になっています。2002年茨城インターハイ時に全面改修を行った当競技場ですが、昨今の競技会事情に対処すべく、県との交渉の結果、来期からのメイン、サブ、投てき場の一部改修も決まりました。

東京オリンピックの前年、2019年開催に向け、全国からの選手、監督、そして陸上競技愛好者の方々を温かく迎えるためにも、今後とも着実な準備に邁進する所存であります。

（文責：理事長　潮田茂）

事務局からのお知らせ

◇◆第23回日本陸上競技連盟トレーナーセミナー開催案内◆◇

日本陸上競技連盟医事委員会トレーナー部は、1）陸上競技における選手サポート体制の確立、2）トレーナーの意識、知識、技術の向上、3）トレーナーの地位確立、を目的として設立し、毎年、「日本陸上競技連盟トレーナーセミナー」を開催しています。23回目の今年度は、下記の要領で開催致しますので、受講希望の方は申込方法に従ってお申込下さい。

期　日：2015年3月27日（金）～29日（日）（3日間）　　場　所：味の素ナショナルトレーニングセンター
参加費：25,000円（教材費込み）　　定　員：100名（先着順）
参加資格：①現在、陸上競技の現場に携わっている方（治療院・病院のみの活動では不可）
②救急法に関する資格を保有、もしくは救急法に関する講習等に参加したことがある方。あるいはセミナー開催までにいずれかの救急法の講習会を受講できる方。且つ、他人の助力なしに一人で救護活動ができる方（特に資格提示の必要はなし）
③3日間全日程を受講できる方
受付開始：2015年1月5日（月）　　締め切り：2015年1月23日（金）
※参加申込の詳細は、本連盟ウェブサイト　http://www.jaaf.or.jp/trainer　をご参照下さい。

◇◆陸上競技研究紀要への投稿を募集致します◆◇

「陸上競技研究紀要」（Bulletin of Studies in Athletics of JAAF）
投稿規定

1. 投稿資格について
特に制限は設けない．
2. 投稿内容および種類について
投稿内容は陸上競技についての理論と実践に関するもので，内容に応じて，総説，原著，資料，指導法および指導記録の報告などに分類される．スタイルは和文，英文のどちらでもよい．
投稿論文には上記の投稿種別を明記し，英文のタイトル，著者，所属，総説および原著には要約（150語以内）をつける．
（注：何らかの理由で英文要約等の作成が困難な場合は，編集委員会にその旨をご相談ください）
3. 採否等について
原稿は査読を行い，査読結果をもとに採否および掲載順序の決定，校正などは編集委員会が行う．
4. 原稿の書き方について
原稿は原則として，ワードプロセッサーで作成する．本文は，横42文字×縦38字で1頁とする．（1頁は約1600字，刷り上がり10頁以内，図表もその頁数に含む，すべて白黒にて作成）
英文は，A4サイズタイプ用紙を使用し，15枚以内を原則とする．
計量単位は，原則として国際単位系（m，kg，secなど）とする．
また，英文字および数字は半角とする．
5. 文献の書き方について
本文中の文献は，著者（発行年）という形式で表記する．
例）　田中（1996）は　――
文献は，原則として，本文最後に著者名のABC順で記載する．書誌データの記載方法は，著者名（発行年）　論文名，誌名，巻（号），ページの順とする．
例）吉原　礼，武田　理，小山宏之，阿江通良（2006）　女子棒高跳選手の跳躍動作 のバイオメカニクス的分析．陸上競技研究紀要，2：58-64.
伊藤　宏（1992）　陸上競技の発育・発達．陸上競技指導教本―基礎理論編―．日本陸上競技連盟編，大修館書店，55-72.
同一著者，同発行年の文献を複数引用した場合は発行年の後にa，b，cをつける．
例）　田中ら（1996b）は，――
6. 原稿の提出先
投稿原稿（本文，図表など）は，下記へE-mailの添付資料として送付するとともに，プリントしたもの1部を郵送する．
〒163-0717　東京都新宿区西新宿2-7-1　小田急第一生命ビル17階
日本陸上競技連盟　「陸上競技研究紀要」編集委員会宛
（Tel 03-5321-6580　Fax 03-5321-6591）
E-mail:　kiyou@jaaf.or.jp
7. 原稿の締め切り
原稿の締め切りは特に設けず，随時受理し，査読を行う．ただし，2014年度版は2015年1月末日とする．
8. その他
本研究紀要に掲載された内容の著作権は公益財団法人日本陸上競技連盟に帰属する．

陸連時報編集委員

◇編集委員
横川　　浩（陸連会長）
三宅　勝次（陸連副会長）
友永　義治（陸連副会長）
尾縣　　貢（陸連専務理事）
原田　康弘（陸連強化委員長）
風間　　明（陸連事務局長）
高橋　克実（陸上競技マガジン編集長）

◇時報編集室責任者
大嶋　康弘
◇時報編集担当
繁田　　進
石塚　　浩
木越　清信
宮田　　宏
本田香代子
森谷　真咲

陸連時報編集室
〒163-0717
東京都新宿区西新宿2-7-1
小田急第一生命ビル17階
公益財団法人日本陸上競技連盟 内
TEL 03-5321-6580
FAX 03-5321-6591
ウェブサイト http://www.jaaf.or.jp/
公式動画サイト http://japanathletics.tv/